

# 文学コンクール



## 奨励賞

【創作文】「12」（じゅうに）

芝浦工業大学柏中学校・三年

佐々木 佑夏さん

### 作品に対する思い・感想

この度は、奨励賞という名誉な賞に選んでいただきありがとうございます。私には、数年ほど海外に滞在し外国語を学ぶ機会を得たのですが、日本語の表現は外国の言葉には見られない独特の美しさを感じます。その美しさを少しでも表現できているのであれば、こんなにうれしいことはありません。最後に、お世話になった先生方、両親に心から感謝を。

「元気ですか？」

いつも通り机に突っ伏そうとした時、その文字は突然に現れた。いや、正確には俺が気が付かなかっただけで、最初から書いてあったのだろう。教卓から見て一番右側の最後列。いい感じに陽の光が差し込んで、ぽかぽかと温かいこの席は、この前のくじ引きで引き当てた、特等席だ。大学生にもなつて席替えをするなんて思わなかったけれども、どうやら出欠がとりやすいとかそういう理由らしいので、特に異論はない。そもそも、出席さえすれば一応単位はもらえるし、教養の授業はあまり好きではない、という理由で睡眠に勤しむのが常である。一緒に講義を受けようと思う友人もいないから、自分には関係がない。睡眠の習慣を邪魔した「元気ですか？」の6文字は、机の隅っこに申し訳なきそうにおさまっていた。

几帳面そうな字。シャープペンだろう、細い筆跡で記された6文字が、きれいに整列している。その6文字がどうにも気になって、その文字の上で寝てしまうのが忍びないような気がして、椅子の背もたれに身体を預けなおした。文字を指先でたどる。

この机の主は俺なのだから、消しゴムで消してしまえばいい。どうせ試験期間になれば文字は消さざるを得ないし、何より俺の安眠を邪魔した罪は大きい。さっさと消してしまえ。

消しゴムを手にとって、文字の真上まで持ち上げたところで、手が止まる。躊躇して手が震えた瞬間、消しゴム君がころりと床に転がった。床に転がった哀れな消しゴムを拾う代わりに、机の上に放置されていた青いシャープペンを手に取る。

「眠い。お前は眠くないの？」

きれいに整理した6文字のすぐ下。0.7ミリの太いシャープペンシルで乱雑に記した12文字は、6文字の3倍ほどのスペースに堂々と居座っている。

これでよし、となんとなく満足感を得た俺は、いつも通り机に突っ伏そうとして、動きを止めた。この、いずれ消えてしまうのであろう文字を消すのはなんだかもつたいない。かといって、写真を撮るわけにもいかない。曲がりなりにも講義中なのだから、携帯を手取るのは憚られた。かと言って、次にこの机に座ったところで、その時にこの文字が消えていないという保証はない。言ってしまえば、ただの机の落書きである。

少し考えた後、授業用に持参しているルーズリーフの束から適当に一枚引き抜いて、18文字の上にかぶせた。裏面に何か書いてあったような気がしなくもないが、ファイリングしていないのであればあまり重要な内容ではないのだろうし、まあ何とかなるだろう。隣に座る、確かスズキだったか、サトウだったかはこっくりこっくりと舟をこいでいるから、ばれることはない。そう踏んで、隣の席から0.5ミリと記載されたシャープペンの芯を一本拝借した。うっすらと透けて見える下の文字を、丁寧に、一文字ずつなぞっていく。結局、満足のいくクオリティーで写し終えるまでに、紙を3枚も無駄にってしまった。ちらりと時計を覗き見れば、授業時間は残り30分。いつもより60分も短い睡眠時間となりそうだ、今夜は一時間早く寝よう。そんなどうでもいいことを考えながら、襲い来る眠気に身を委ねた。

「……って話があったんだよ。おかしいだろ？」

正午過ぎの学食は、ちょうどいい具合に生徒がいなくなっていた。天窓から差し込む日差しがまぶしい。クーラーが効いているはずなのにまったく涼しくないのは、開け放たれた天窓と通行口のせいだろう。初夏の風がさわやかに吹き荒れる——けれど気温のおかげで風自体が生温い。

「いや、襲い来る眠気って…なに、その崇高な言い方。」

俺の向かいに座って、シヤケ定食を美味そうに頬張っていた幼馴染、和樹は、綻んだ顔を一变、形のいい眉をきゅつと細めた。フルネームは岩橋和樹。少し癖のある黒髪に、ぱっちりとした二重の目。一見間抜けそうに見えるが、こう見えて法学部の特待生枠をもぎ取ったエリートである。この男、パツチリ二重の童顔の割に、いちいち言葉がえげつない。ただ居眠りしてただけでしょ、と呆れ顔で続いた言葉に、わざとらしくため息をついて見せた。

「お前全く何もわかってないよな。論点はそこじゃないんだけど。」

ぼんぼんときれいに飛び交う言葉のキャッチボール。何を言っても欲しい返答が返ってくる感覚は、とても心地良い。和樹に会うのは約2週間ぶりのことだった。たった2週間会わなかっただけでずいぶん懐かしい感覚に陥るのは、共に過ごした12年の重みだろう。

「論点って…文字の存在意義、ってこと？悠馬が授業中寝ないなら、それがその文字の存在意義だろ？」

シヤケの切り身を口に運びながら答えた親友に、

「そんな存在意義があつてたまるかよ…。」

クシャリと髪を掻き乱す。ちよつと悠馬。もう、食事中なのに頭掻かないでよ、汚いなあ。向かいの席から小言が飛んできた。ああ悪い、と誠意ゼロの態度で返す。何かが気になって仕方なくて、心が落ち着かない。ソワソワして、うずうずする、まるでゲームを前にした子供に戻ってしまったかのようにだ。俺はそれほどにあの6文字に心を揺さぶられていたのだろうか、それとも。

「そもそもさ…」

「ん、何？」

文字についての他愛ない会話を交わすこと数十分。丁度、俺のカレーがあと3口くらいになって、和樹のシヤケ定食が味噌汁だけになったとき。

「なにをそんなにこだわってるのさ。悠馬だってどうでもいい落書きとかよくしてただろ？」

昔、と付け足された言葉に、微妙な空気が流れる。和樹がしまった、という顔でこちらをのぞき込んできて、その視線から逃げるように、学食特有の大盛り、もう冷めたカレーを口にした。はむ、と頬張ったカレーは冷めていて、なぜか塩辛く感じた。

特に、仲が悪くなったわけではない。

小学校、中学校、高校。12年間を2人で過ごしてきた。その12年に比べたら、この3ヶ月なんて短い時間に過ぎない。

ただ、学部が離れて、すれ違う時間が増えただけ。学科が違えば、一般教養の時間以外は講義が被る事はほとんど無い。今日だって2週間ぶり、と言いながら、面と向かってゆつくりと会話するのは1ヶ月ぶりの事だ。

たったそれだけで、昔、という言葉一つで、沈黙してしまうくらいには二人で過ごす時間は格段に短くなった。ただ、それだけのことなのだ。

カチャ、とわざと音を立てて箸を置いた和樹が、気まずい空気を払拭しようともするかのように、ねえ、と声を上げる。

「ねえ、カラオケ…カラオケ、寄って帰ろうよ？」

「…たまには、いいかもな。」

だから、和樹が嫌いなはずのカラオケに寄ろう、と言ったのも、煙草の臭いが嫌いな俺が賛同したのも、ただの気まぐれに違いないのだ。

北門を通って、繁華街に向かう。繁華街の少し端、地下へと続く階段を下ると、和樹は少し戸惑ったような顔をした。大学までは、俺も和樹も、バスを使っている。地下鉄を使うの、なんでバスに乗らないの、と聞こうとして、でも聞けずにいるのは空気で分かった。先ほどの失言を気にしているのだろう。俺はい

つもなら入れるはずのフォローを入れずにいたし、和樹も俺にフォローを入れられるのは気まずいのだろう、助けを求める視線を送ってくることもない。結局2人ともだんまりで、ホームに滑り込んできた電車に乗った。

地下鉄に乗って、家の最寄り駅より一つ前、高校の最寄り駅で降りる。高校の最寄り駅には、学生御用達の格安カラオケがあったはずだ、というのは3年前、現役高校生だった頃に仕入れた予備知識だ。

「いらっしやいませー、何名様でしようか？」

制服に身を包んだ店員がにこやかに定型文を口にする。

「2人。えっと、」

「1時間で。」

ちらりと和樹に視線をやると、和樹はまるで予想の範囲内、とでもいうように俺の語を継いだ。

結論から言うと、カラオケはやはり煙草臭かったし、相変わらず和樹は音痴だった。安っぽいソファーに腰かけて、一時間300円の、最高にコスパの悪いドリンクバーを飲んだ。安いと言っても、それは高校生だけの話のようだ。これなら、近場のファミレスで会話に興じる方がよっぽど有意義である。

ありがとうございますー、とどこか間延びした店員の声に見送られて、自動ドアの向こうに足を踏み出す。ある程度覚悟はしていたが、煙草の臭いが体にまとわりついて、正直不快だ。やっぱり来るべきじゃなかったかもしれない。煌々と光る街灯から隠れるように身を寄せ合って、無言で15分の道を歩く。ここは駅前で、ここから家まで電車で一駅なのに、高校時代のように、歩いて帰る。

3年間通った通学路は、まったく変わっていなかった。3ヶ月でそう簡単に物

事が変わるわけがないのだ。俺と和樹の関係だって、変わらないはず。そう言い聞かせて一歩ずつ歩を進める。気まぐれにスマートフォンをいじって、音楽を流す。ん、とイヤホンを差し出すと、和樹は少しだけ驚いたような顔をして、でも結局受け取った。一曲、二曲。三曲、四曲目。俺がつけている右側のイヤホンからは、1人の歌手の歌声しか聞こえない。デュエットソングのはずだから、もう一人の声は左側から流れているのだろう。本来一人で使うイヤホンを二人で使って、それぞれが別の声を聴いている。

「パラドックス、だっけ。これ。」

和樹が少し困ったような笑みで呟いた。

パラドックス。ギリシヤ語で、矛盾という意味のこの単語は、確かに今の状態を指すにはぴったりの言葉かもしれない。

「そう、パラドックス。」

「再生中・paradox」という文字が画面の中を回るのがなんだか気に食わなくて、イヤホンをコードごと引っこ抜く。え、と和樹が発した間抜けな声に応ずる言い訳を咄嗟に探した。パツと目に付いた街灯を、ほら、と指さす。4曲聞き流している間に、たどり着いた場所。それぞれの家への分岐点であるT字路。このT字路の街灯前が、高校時代の待ち合わせ場所だった。

「もうこんなとこ来てたんだ。気づかなかったや。…じゃあ、また。」

穏やかな顔で手を振る和樹に、息を1つ吐く。

「…おう。」

和樹がウチに寄って帰らなくなったのは、一体いつからだだったのか。俺はそれをいまだに思い出せずにいる。

次の講義の日、その文字は、机の真ん中に薄く、佇んでいた。

「きょう、遊びに行っても、いいかな？」

前回より大きく、真ん中に書かれたはずのその字が、前回よりも弱々しく感じ

る。

はっと思いついたって、この前と同じルーズリーフを敷く。手際よく写し取った文を、かすれさせないように、汚さないようにファイルに挟んで、荷物をまとめた。

「すみません、腹、痛いんで、早退します！」

法学部は、今の時間は講義がないはずだ。今朝掲示板で横目にした授業情報を反復しながら、和樹を探す。携帯で和樹を呼び出そうとして、緑の通話アイコンをタップする。すんでのところで手を止めた。そのまま端末ごと電源を切る。携帯には頼らない。自分で、見つけ出す。

図書館、いない。学食、開店前。そう広くもない都心のキャンパスは、探す場所も少ない。中庭の階段の上に、ふわふわと揺れる見慣れたくせ毛を見つけた。

「和樹！」

「うお、びっくりした…なにさ、悠馬？っていうかお前今、講義中…」

眦を下げて困ったように笑う和樹の声を遮れば、彼はビクリと体を強張らせた。

「お前、どういうつもり？」

「…何が。」

「お前、俺になんか言いたいことあるんじゃないの？」

くしゃり、と破顔した親友は、少し泣きそうな、でも晴れやかな顔で叫んだ。

「じゃあさ、きょう、悠馬んち行ってもいい？」